

# 話し言葉コーパスにおける 言い淀み分布の定量的解析

研究者：渡辺美知子  
(独立行政法人国立国語研究所非常勤研究員)

## 研究成果要約

### 研究活動概要

日本で初の大規模話し言葉コーパスである『日本語話し言葉コーパス (CSJ)』(独立行政法人国立国語研究所、2004)を用いて、日本語の言い淀み現象の中で最も頻度の高い、「エート」、「アノー」などのフィラーの頻度、種類、出現位置を以下の4つの視点から分析した。

- 1) 社会言語学的要因(改まり度や話者特性)とフィラー使用との関連
- 2) 談話構造とフィラーの頻度、種類との関連
- 3) 統語環境(文境界、節境界、節内の文節境界、語境界など)とフィラーの頻度、種類、持続時間との関連
- 4) 句や節などの後続構成素長とフィラーの頻度、種類、持続時間との関連

### 成果概要

- 1) 話者のフィラー選択には、場の改まり度、話者の性別・年齢といった社会言語学的要因が影響すること、しかも、影響の強い要因はフィラーの種類によって異なることが明らかになった(研究成果報告書参照)。この成果は、2007年11月、英文誌 *Speech Communication* に以下のタイトルで投稿し、現在査読中である。

“Sociolinguistic Factors Affecting Speakers’ Choice of Filler Types in Japanese Presentations”

- 2) 談話の深い境界では、他の文境界、節境界よりも、フィラーの出現率が高く、フィラーに先行するポーズ長も長いことが明らかになった。この成果は、2007年9月、音声研究者のための世界最大規模の学会(採択率約6割)である *Interspeech 2007* (Antwerp, Belgium) で、“Features of Pauses and Conjunctions at Syntactic and Discourse Boundaries in Japanese Monologues”というタイトルで発表した。
- 3) 節境界においては、統語的な境界の深さとフィラーの出現率との間に対応のあることが明らかになった。文節境界においては、文節の係り先までの距離とフィラーの出現率との間に対応のあることが明らかになった。
- 4) 主節に対する従属度の強い節境界で、フィラーの出現率と後続節長との間に対応のあることが明らかになった。

## 成果活用について

2006年度に東京大学に提出した博士論文と本研究内容内容を含ませた本が、2009年2月にひつじ書房より出版の運びとなった。書籍として出版されることにより、コミュニケーションにおけるフィラーの働きについての興味と理解が、より多くの人々に広まることが期待できる。また、英文であるため、海外の読者にも読んでもらうことができる（各章に日本語の要約もある）。日本語と他言語の言い淀みの分布や種類の違いを比較することによって、発話生成プロセスの言語普遍性と個別性についての理解が深まることが期待できる。

筆者は現在、東京大学大学院新領域創成科学研究科国際交流室で日本語教育に携わっているが、教室で日本語のフィラーについて積極的に教えている。言葉につまったときに“um”、“uh”と言う留学生に「エート」というフィラーを使うよう指導すると、日本語らしさが驚くほど向上する。初級の学習者にも効果がある。フィラーは外国人にとっても、コミュニケーションを円滑に進める上で非常に有効であることを実感している。

## 今後の研究課題

フィラー分布についての量的分析はかなりできたが、種類別に見たフィラーの分布についての分析がまだ十分ではない。フィラーの生起に影響する要因は多様であることが予測されるため、今後、マルチレベルモデルなどの新しい統計手法を用いることによって、より精度の高い言い淀み分析を行っていきたい。また、音韻面だけでなく、韻律的要素（ピッチの変動、持続時間など）の分析を行うことによって、フィラーを新しい視点から把握、分類することが可能になると思われる。